



アニバーサリー

2011年7月にスタートした本連載は、今回で10周年を迎えました。一度の休載もなく、継続できたのは読者のみなさまの温かいお言葉のおかげであるとともに、毎回、丁寧に誌面を作ってくださいるスタッフのご尽力の賜物です。心より感謝します。

それぞれの人にさまざまな種類の周年があるとは思いますが、ファッション界において、今年もつとも話題の周年を迎えているのは、ココ・シャネルで誕生100年というダブル・アニバーサリーです。

シャネルは20世紀で最も大胆な価値転倒を成し遂げた革命家のひとりです。近代の貴族的価値をことごとく覆すことに執念を燃やしたシャネルは、絹の代わりにジャージーのような地味な生地を流行させ、高価な毛皮をコートの中につけて見えなくし、貴金属をただの石に変えてフェイクを礼賛しました。西洋一裕福だった公爵からの求婚を断り、結婚より自立を選んで、死ぬ前日まで働き通しました。仕事においても私生活においても、あつさりとして21世紀を先取りしています。そのシャネルにまつわる周年が重なるので、今あらためてシャネルの功績をふりかえらうという機運が高まっています。たとえば、芸術総合誌「ユリイカ」は7月号でココ・シャネル特集を組みました。文芸・芸術批評で知られるこの雑誌がファッションの領域を扱うのは稀なことですが、私もシャネルの伝記を二冊、翻訳・監訳している立場から、フランス文学者の鹿島茂先生と巻頭で対談しています。

また、近年に発掘された資料を盛り込んだドキュメンタリー映画、「ココ・シャネル 時代と闘った女」も7月23日より公開されます。第二次世界大戦終結直後にパリを脱出し、スイスに逃れたシャネルの10年間の謎に新たに迫る、実証に基づく刺激的なドキュメンタリーです。

これらをはじめ、いくつかのプロジェクトに関わるなかで、やはりシャネルは時代を経てもインスピレーションの宝庫だと実感します。とりわけ、多様性が重視され、多方面の顔色を窺いすぎて価値判断の基準をどこにおいていいか迷う時など、シャネルの態度が答えの一つのヒントになります。

ココ・シャネル 時代と闘った女
監督・脚本：ジャン・ロリターノ
配給：オンリーハーツ

中野香織 「ファッション歳時記」

119

彼女は言いきります。「モード、それは私だ」と。偽物が横行する中で、絶対に確かで信じられるものこそ、正直な自分自身の感情。そこに根差すものこそが本物であり、流行の源なのだ、と。この「態度」の効力が絶大であったからこそ、結果として、シャネルが生んだ数々のモードは、20世紀の女性の自立と社会進出を後押しすることになりました。



なかのかおり
1962年生まれ、富山市出身。服飾

史家として研究・講演・執筆をおこなうほか、昭和女子大学客員教授、企業の顧問を務める。株式会社Kaori Nakanaka代表取締役。東京大学大学院修了。英国ケンブリッジ大学客員研究員、明治大学特任教授などを務めた。著書に、「イノベーター」で読む「アパレル全史」（日本実業出版社）、「ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史」（吉川弘文館）ほか多数。

現在、ビジネス界限では、イノベーションを起こすためにアート思考が必要だと盛んに言われております。アート思考って、煎じ詰めれば、シャネルの態度そのものではないでしょうか。つまり、確かと感じられる自分の感覚に立脚したものを、絶対の自信を持って世に問うていくこと。孤独な作業で、逆風も強いかもしれない。そのプロセスを貫いていく過程そのものに驚きと発見が満ちていることを、シャネルの人生は教えてくれます。

そうとわかっていても、持てないのが自信。わからないのが自分の感情。そもそも才能がないのか、10年ぼつちじや修行が足りないのか。